

教職志望学生の自明性を問い直すための授業実践†

—「なぜ勉強しなければならないの？」という問いに対する回答の検討—

織田 泰幸*

三重大学教育学部*

本稿は、教職関連の授業において、教職志望学生の自明性を問い直すことをねらいとした授業実践の紹介を通じて、その意義および成果と課題について検討することを目的とする。具体的には、筆者が担当する『教職入門』における、「なぜ勉強しなければならないの？」という問いに対する回答について受講生たちに考えてもらう回の授業の概要を紹介する。

キーワード：教職、勉強、学習幸福型、憧れに憧れる関係

1. 問題意識

「なぜ学校に行かなければならないの?」「なぜみんな勉強するの?」「なぜ校則はあるの?」「なぜいじめをしてはいけないの?」「なぜ義務教育は9年間なの?」…教育の世界では、このような素朴な問いが子どもから生まれる場合がある。こうした問いに対しては様々な答え方がありうるが、自明視されていることがらであるがゆえに、ふいに問われると答えに窮することが起こりうる。しかし、教師を目指す学生たちにとっては、素朴だが根本的な問いに対して、曖昧に答えたり、適当にやり過ごすのではなく、将来自分が向き合う子どもたちとのやり取りを念頭に置きながら、真剣に深く考えておくことが重要ではないだろうか。以上のような問題意識から、筆者が担当する教職関連の授業では、こうした問いについて考える回を設定している。

本稿では、その中でも、筆者が担当する『教職入門』¹における『「なぜ勉強しなければならないの?」という問いにどう答えるか』をテーマ²とする授業について紹介する。この回の授業では、子どもからの「なぜ勉強しなければならないの?」という素朴な疑問に対する様々な回答の紹介を通じて、受講生自身の思考の前提や常識的なものの見方、すなわち「自明性」をあらためて問い直して拡張することを目的とする³。

2. 「なぜ勉強しなければならないの?」という問いに対する回答の検討

2-1. 演習問題

授業の冒頭では、今回の授業のテーマを確認する。次いで、「なぜ勉強しなければならないの?」という問いは、多く

の人がこれまでに一度は考えたことがありながら、実際にはあまり深く考えられないこと、将来自分が質問される可能性があること、特に教師を目指す人にとっては、「そのうちわかるよ」「勉強しておいて損はないよ」とはぐらかすのではなく、子どもの「なぜ」「どうして」という素朴な疑問をしっかりと受け止めて答えてあげることが大切ではないか、といったことを伝える⁴。その上で、演習用紙を配付し、各班で次の場面について考えてもらう⁵。

問題:あなたは自分の子どもから、「なぜ勉強しなければならないの?」と聞かれたときにどのように答えますか?なるべくたくさんの答え方を考えてください。(5~6分程度)

所定の時間が経過した後に、「班の中で、いくつかの答え方が出ましたか」と答え方の数を尋ね、「〇つ以上出た班」という形で挙手をしてもらう。例年、5つ以上が8割程度、8つ以上が2割程度であり、10以上の答え方が出る班は稀である。次に、「班の中で出された答え方の中から最も説得力のある回答を選んでください」と述べて、いくつかの班から全体に発表してもらう。この問題に対しては、例えば以下のような回答が提出される。

- * いい学校へ行くためだよ(学歴や資格を取得するため)
- * 勉強しないと買い物もできない生きていけないからだよ(生活に最低限必要な知識を得るため)。
- * 世間体のためだよ(他者からの尊敬や敬意を得て、優越感に浸れるため)
- * 選択肢・可能性を広げるためだよ(将来やりたいことを見つけるため)。
- * 忍耐力をつけるためだよ(やりたくないことでもやり、嫌

- いな人とも仲良くする力をつけるため)
- * 将来自立するためだよ(就職するため、親元を離れるため)。
 - * 立派な大人になるためだよ(恥ずかしくない大人、人に騙されない大人になるため)。
 - * 知りたいと思ったことを一人で考えられるようにするためだよ(探求する力をつけるため)。
 - * 人類の繁栄を維持するためだよ(世界平和のため、文明を守るため、次世代へつなげるため)。
 - * なりたい自分になるためだよ(自分が生きたい人生を生きるため)。
 - * 豊かな人生を送るためだよ(人生を楽しくするため、お金持ちになるため、人生の勝ち組になるため、知識が多ければ同じ世界に住んでいても見えるものが違ってきて楽しくなるから)

ここでは「なぜ勉強しなければならないの？」という問いに対する、受講生の考えるいくつかの答え方について確認する。そのうえで、授業者(筆者)から「私なりにこの問いを考えた結果、およそ11通りの答え方があると思います」と伝え、答え方を整理したプリントを配布する。

2-2. 11通りの答え方

11通りの答え方を紹介する前の導入として、次のエピソードを紹介する。

解剖学者の養老孟司によれば、「なぜ勉強しなくちゃいけないの？」という質問に対して、昔なら「くだらないことを聞くんじゃない！」と叱られておしまいだったという(おおた 2013年, 109頁)⁶。この答え方は、子どもからの素朴な問いかけに対して理由を示して答えずに叱責するものであるため、反発したり意欲を喪失する子どもがいると思われる。そのため、教師を目指す皆さんにとっては、子どもの問いかけにできる限り真摯に向き合って答えることが大切ではないか、と授業者の意見をあらためて伝える。

以上の導入後に、以下のような具体的な答え方を紹介していく⁷。

答え方① 義務型

「義務教育だから、勉強することは子どもの義務なんだよ。憲法にも書かれているよ。」

先の問いには、「なぜ学校に行かなければならないの？」という疑問が背景にある場合がある。この疑問に対して、「すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ」(日本国憲法第26条2)を根拠とする答え方である。実際には、義務教育段階の子どもに対して教育の義務を負うのは保護者であるため、正確に

言えば、この答え方は間違っているのだが、子どもに勉強する理由を納得してもらうための一つの方法となりうる。

答え方② 学歴社会型

「たくさん勉強していい大学へ行けば、いい企業に就職できて、高いお給料をもらうことができるから、いい人生を送ることができるよ。」

「受験勉強→高い偏差値→いい高校→いい大学→いい企業→社会での安定・成功という連鎖」(荻谷 2006年, 236頁)によって説明する学歴社会を前提とした答え方である⁸。社会学者の山田昌弘によれば、戦後日本(特に高度経済成長期)の教育システムは、医学部に行けば医者になり、一流大学の法学部に行けば官僚や弁護士になり、中堅大学の経済学部に行けば上場企業のホワイトカラーになり、女子短大は商社や銀行の一般職になることが予想され、出口で就ける職業が安定的に確保されるシステムとして機能してきた(山田 2004年, 89頁)。このように勉強することの「努力が報われる見通しがある」ことが、青少年に希望をもたらしてきたという指摘を紹介する。

答え方③ モトリアム延長型

「勉強して進学すれば、その期間は学生の身分でいられるから働かなくてすむよ。進学せずに働くことになったら、その分、友達と遊ぶ時間も短くなるよ。」

モトリアムとは、就職するまでの猶予期間のことである。より上位の学校段階へ進学することによって、就職するまでの期間が延長されることのメリットを理由とする答え方である。経済学者の橋本俊詔は、「一部の若者の間に働き始める年齢を遅らせようとする意識がある」と述べ、「働くのはいやだからととりあえず遊ぶことのできそうな大学に籍を置こうとする人」(橋本 2015年, 20頁)をモトリアム症候群の例として挙げている。

答え方④ 未来リスク軽減型

「今は将来何になるかわからないかもしれないけど、将来就きたい職業がみつかったとき、その選択肢をなるべく減らさないようにすることができるよ。」

受験対策として、本人の希望進路の受験科目に応じて選択科目数を減らす場合があるが、後の志望校の変更に伴う受験科目の変更、あるいは将来の職業において求められる知識や技術を考慮した場合、幅広い科目を勉強しておくことが将来の選択肢の減少を防ぐという理由から説明する答え方である⁹。「モトリアム延長型」が将来の職業をあまり意識しない答え方であるのに対して、「未来リスク軽減型」は将来の職業を明確に意識した答え方である。この答え方として、タレントの島田紳助の「選択肢を増やすために勉強する」話

のエピソードを紹介する。

「京都大学の法学部出てマッサージ師をしている姉ちゃんがおるんですよ。『何で京大を出てそんな仕事してるん？』って聞いたら、「(仕事は)色々できるけど、私はその中でマッサージを選んだんです」って言いよったんや。これはこづかい1万円もろうてる人と、1000円しかもろうてへん人の差と一緒にや。1万円あれば何でも買える。300円のもの買うてもええねん。でも1000円しか持ってへん奴は2000円のもの買えへんやん。学歴はお金と同じや。だから勉強しなアカンねん。」(日本テレビ系『人生が変わる1分間の深イイ話』2010年4月12日放送分より抜粋)

答え方⑤ 人生困難耐性型

「学校で習う問題は答えが出るけれども、社会に出てから直面するのは、答えの出ない難しい問題ばかりだよ。それに、社会に出たらやりたくない仕事でもやらないといけないときがあるよ。難しい勉強ややりたくない勉強をするのは、人生を生き抜くための基礎的な訓練なんだよ。」

勉強をすることが、人生で直面する困難な問題を解決するための訓練になるという答え方である。これに近いものとして、タレントで予備校講師の林修の意見を紹介する¹⁰。

「社会に出ると、受験とは違って、答えが一つかどうか、それ以前に答えがあるかどうか分からない問題を解かねばなりません。それでも受験という答えのある問題を解く練習をする中で、答えのない問題を解ける基礎ができる部分もあるのです。」(林2013年, 50頁)

答え方⑥ 社会人能力訓練型

「勉強する内容ではなく、勉強することを通じて形成される能力が、社会人として生きていくための基礎になるんだよ。」

勉強することで獲得する知識の内容ではなく、勉強することを通じて形成される汎用的な能力の観点から説明する答え方である¹¹。ここでは教育学者の齋藤孝の指摘を紹介する。「物事を論理的に考える力をはじめ、科学的に見る眼、苦手なことを克服する方法、努力し続ける粘り強さ、段取りをしたり予測したりする力、ミスが減らす確認力など、受験勉強で培った力や技を教え上げたらきりがありません。」(2014年, 5頁)。

答え方⑦ 生活場面応用型

「勉強で学んだ知識は、実際の生活の中で役に立つからだよ。」

「なぜ勉強しなければならないの?」という問いが生まれる背景の一つには、例えば、数学の因数分解や三角比や証明問題が、将来のどんな場面で何の役に立つのか、という疑問を子どもが抱えている場合がある。これに対して、社会の

様々な場面で数学が役に立つ例として、ビートたけしの「映画の因数分解」の話(2012年, 131頁)、武田邦彦の「金魚すくいのためにCOSを習っている」話(フジテレビ系『ホンマでっかTV』2011年8月24日放送)、競馬やカジノにも数学は関連する話(秋山・門間, 2011年)、数学的思考がインチキ臭い儲け話のウソを見破りその裏にある真実を突き止めることに役立つ話(鍵本2007年, 51頁)を紹介する。

答え方⑧ 職業必須型

「将来なりたい職業として仕事をしていくためには、専門的な知識が必要になるからだよ。」

例えば、エンジニアには数学や物理学の知識が、医師には解剖学や生理学や薬学の知識が必要不可欠であることを理由として説明する答え方である。この答え方は、「生活場面応用型」以上に、将来の職業と専門的な知識との直接的な関連性を根拠とする説明であるため、将来の職業が定まっている子どもに対しては根拠が明確であるが、将来の職業が定まっていない子どもの場合は、「就職した後になってから、学校で勉強した幅広い知識が役に立つときがくる」ことを説明する必要がある。後者の例として、以下のような事例を紹介する¹²。

「機械製造の会社に勤めて営業職をやっているうちに、海外輸出を担当することになった人の場合、国語・英語・世界史・地理の知識が必要になり、ビジネス書を読むためには政治・経済や倫理・社会の知識が前提となる。市役所職員になって、地域の環境問題の解決について外国のケースを調べながら施策を立案し実行していくことになった場合、様々な教科の知識を足場に広く物事を知り、考えていく必要がある。」(広田2011年, 166頁を修正)

答え方⑨ 社会発志向型

「学問の発展があるから、科学技術が発展し、世の中が進歩している。勉強することは、世の中の発展や進歩に貢献することにつながるんだよ。」

生活や職業それ自体ではなく、より広く科学技術の発展に貢献するために、人類の叡智の結晶に触れることの重要性を理由とする答え方である。この答え方に相当するものとして、「私たちの快適で幸福な生活は、理科や数学、社会、言語、芸術など、人類がこれまでに学んできたものの総体でできています」(齋藤2011年, 18頁)、化学の発見の積み重ねの結果として、化学薬品ができ、不治の病が治るようになり、ポリエステルなどの化学繊維やプラスチックなど便利なものが誕生して、私たちの生活は格段に便利になった(齋藤2005年, 151頁)、「橋を架けるにも人工衛星を打ち上げるにも微積分は必要です」(苫野2013年, 93頁)といった説明を紹介する。

答え方⑩ バランス栄養摂取型

「勉強は食事と同じだよ。好き嫌いなく何でも勉強することが、あなたの成長につながるよ。」

勉強を食事に喩えて、バランスのよい勉強が人間の健全な成長と発達につながるという理由から説明する答え方である¹³。この答え方の例として、天台宗の尼僧である瀬戸内寂聴の次のような指摘を紹介する。

「勉強とは食事と同じです。人間は食事をして体に栄養を取り込んで成長します。勉強とは知識を取り込んで頭や心を成長させることです。勉強とはいわば「心の栄養」を取ることです。食べるものをしっかり食べていれば体は大きくなりますが、勉強をしていないと中身のないでそこないの人間になってしまいます。」(おおた 2013 年, 41 頁)

答え方⑪ 学習幸福型

「勉強をしたり学問をすること、それ自体がとても幸せなことなんだよ」

学ぶことそれ自体の「喜び」(驚き・発見・知的興奮)を理由とする答え方である。この答え方は、社会人学生や研究者に多いこと、「世界には戦争や災害で学ぶ機会そのものを奪われている子どもたちが無数に」おり、「他のどんなことよりも教育を受ける機会を切望している数億の子どもたちが世界中に存在する」(内田 2007b 年, 35 頁)ことについて言及したあと、次の DVD 鑑賞へと移る。

2-3. DVD 鑑賞を通じた「学習幸福型」の回答の理解

ここで鑑賞するのは、TBS 系列の『学校へ行こう! MAX』における、サイエンスプロデューサーの米村でんじろう先生の科学の授業である(2007 年 7 月 17 日放送分)。以下では、それらの鑑賞部分の概要を紹介する。

番組の内容は、進行役である V6 の森田剛と井ノ原快彦とともに、米村でんじろう先生が、母校の千葉県立市原高等学校において科学の実験を披露するものである。でんじろう先生は、番組冒頭において、「生徒たちに何を教えたいですか」という質問に対して、「科学の楽しさを教えたいと思っています」と答える。次に、あいさつ代わりに実験として、串刺し風船(風船のおへその部分に串刺しを刺すと風船が割れない実験)と瞬間ポップコーン(鍋の下部にポップコーンを、上部に豆を敷きつめた状態を見せておき、蓋をして鍋を振ってから蓋を開けるとポップコーンが出来あがっているように見える実験)を行い、森田と井ノ原を驚かせてから、その原理(理屈)について解説する。

その後は、教室へ移動して、高校生を相手に、次々と科学の実験を行っていく。具体的には、ペーパーブーメラン(紙

製のブーメランを投げて手元に戻ってくる実験)、イライラ棒(長い風船をマフラーでこすって発生した静電気をコップにためて、コップから伸びたアルミ棒に触れないように輪っかを通す実験)、電気水(電気コップに水を入れて静電気を帯びさせ、その水を飲むと電気を感じる実験)、ろくろレコード(ろくろの上にレコードを置いて回転させ、紙コップに竹串をつけたものをスピーカーと針の代わりにして音楽を聴く実験。名刺を使ってレコードの音を拾ったり、竹串を奥歯で噛んで骨振動でレコードの音を聴く実験)、塩の花模様(ボウルにビニール膜を貼り、その上に塩をまいて、ボウルに声を送ると振動で音の模様が見える実験)、パネ電話(糸電話の糸をパネに代えて話すと声が反響してエコーのように聞こえる実験)、空飛ぶ電気クラゲ(スズランテープを 30 本くらい割いたものに静電気を帯びさせ、同種の電荷を帯びた長い風船を向けるとテープがクラゲのような形で宙に浮く実験)、ダイラタンシー現象(片栗粉を水に溶いた高濃度の液体に力を加えると固まる現象を応用して液体の上に人間が立つ実験)である。

以上のテレビ番組を鑑賞した後に、班員どうして自由に感想や意見を出し合うフリーセッションの時間(3~4 分程度)を設ける。その後、授業者からは、「学習幸福型」の事例として米村でんじろう先生の授業を観てもらったこと、でんじろう先生の授業スタイルは、実験をしてから原理を説明していること、番組中に V6 のメンバーが「何で?」を連発していたため、授業の中でたくさん驚きや疑問が生まれているのではないかと、といったコメントをする。

その後、『学習幸福型』が、他の答え方とは異なるのはどういう点だと思いますか?と問いかけ、この問題について班で考えてもらう(2 分程度)。そのうえで、この問題に対する 3 つの回答を紹介する。

回答 A. 「役に立つ」vs「役に立たない」を問題にしていないこと

「学習幸福型」以外の答え方の多くは、受験や生活や職業といったように、「それが何の役に立つのか?」という功利的な問いに対する答えを求めている。これに対して、「学習幸福型」は、それが役に立つどうかに答えるようとするものではない。

回答 B. 「手段」vs「目的」を問題にしていないこと

「学習幸福型」以外の答え方の多くは、「それが何のためになるのか?」に対する答えを求めている。例えば、学歴を取得するため、大学に進学するため、職業に就くため、社会の発展のため、といった形で、何かの目的を達成するための手段として勉強をとらえている。これに対して、「学習幸福型」

は、学習することそれ自体が目的となる「自己目的的な行為」となる。

回答 C. 「憧れに憧れる関係」であること

齋藤孝によれば、教育関係の根幹にあるのは「憧れる関係」であり、学ぶことは他者の「憧れに憧れること」である。従来の教授・学習観や教師－生徒関係は、①教師中心型（教師から生徒への知識の伝達を重視する。教師は教育的に望ましいものを生徒に伝えるべきだと考える）か、②児童中心主義（子どもの興味・関心を中心とした授業の構成を重視する。子どもの望むものこそが教育的にふさわしいと考える）かという対立図式に陥る場合が多かった。

これに対して、「憧れに憧れる関係」は、それらのいずれでもない。教える側が、憧れの対象にむかって情熱的に突き進んでいるベクトル（方向性と量）を有しており、これが学ぶ側を刺激する。教える側が学ぶ側に教えるというよりは、学ぶ側が教える側の世界観に引き寄せられていき、学ぶ側も教える側の「憧れの対象」へ憧れることで興味・関心を深めていく関係である。

この関係からすれば、米村でんじろう先生は、科学の世界に対して強い憧れを抱いており、授業の中で心の底から科学の実験を楽しんでいるように思える。その様子を見た生徒たちが、自然に先生が憧れている対象（世界観）へと引き込まれていき、結果として、科学の面白さや楽しさに触れることになる。「学習幸福型」の観点に立てば、こうした教授・学習観や教師－生徒関係が理想的である。

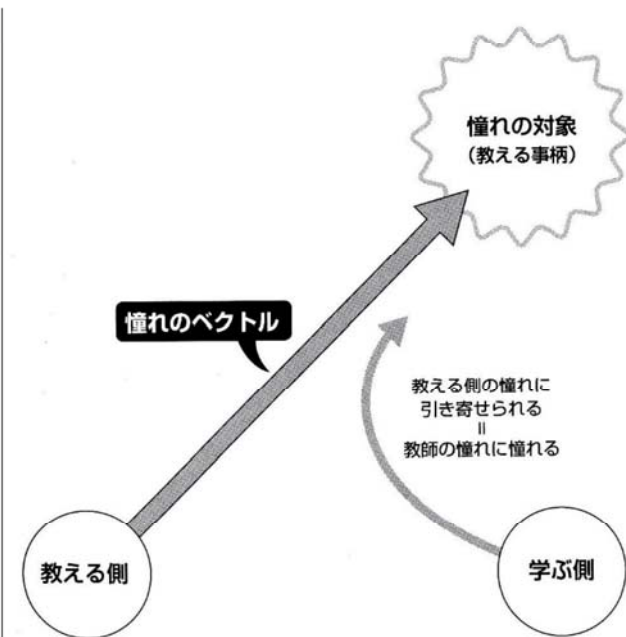


図1 憧れに憧れる関係（出典：齋藤 2004 年，57 頁）

2-4. 「学習幸福型」に関する様々な見解

以上のような説明を行ったうえで、「学習幸福型」の答え方と関わるいくつかの事例や見解を紹介する。

- * 70 歳で夜間大学に通う女性の事例「この年になって勉強しても、若い人のように将来役立つことはないかもしれませんが。でも学問や知識は、どんなにお金があっても買えない宝物。これがないと、感動さえできないんです。そんな人生つまらないでしょう。だから私は自分の人生を幸せなものにするために学んでいます。」（読売新聞 2002 年 6 月 17 日付）
- * 思想家の内田樹「ある職業に就ける確率が上がれば人間の学習意欲が上がり、その確率が下がれば学習意欲が下がるというほどにことは単純ではないように思える…学習を動機づける人間的ファクターの中には、「努力に対する将来的リターン」の期待だけではなく、「努力そのものから得られる知的享楽」も含まれる…。たぶん今の学校教育でいちばん言及されないことの 1 つが、「学ぶことそれ自体がもたらす快樂」である（内田 2007a 年，42 頁）。
- * 社会学者の上野千鶴子「私は研究者の最大の報酬は、頭の天井がスポーンと抜けるというか、「わかった！」「見えた！」という快感だと思うのです。この快感が最大の報酬。ある種のドーピングみたいなもので、これがあるからどんな不遇な目にあおうが研究者はやめられない。」（上野 2002 年，107 頁）。
- * 哲学者プラトン「古代ギリシャにプラトンという偉い学者がいました。弟子がプラトンに聞きました。『なぜスポーツ競技の優勝者にはご褒美が与えられるのに、学者にはご褒美がないのでしょうか』。するとプラトンは次のように答えました。『ご褒美とは、その人がしたことよりも価値あるものでないと意味がない。しかし知恵を得る以上に価値があることはこの世に存在しない。だから知恵を得た者には与えるべきご褒美がないのだよ』。（茂木健一郎：おおた 2013 年，97 頁）。

以上のような事例や見解を紹介した後、授業者から次のような趣旨のコメントをする。

どんな学問分野（教科）であれ、その学問に特有の面白さがある、それを学ぶ側（子どもたち）に伝えることが大切だと思う。ただし、その面白さは、「教える側」（教師）がかなりの研究を積み重ねなければ、伝えることが難しい。そもそも、「教える側」が面白いと思っていないのに、「学ぶ側」に面白さを伝えることは極めて難しい。一番不幸なことは、「学ぶ側」が勉強をすればするほど、勉強が嫌いになってしまうこと。勉強することをどんどん好きにさせるのが、「教える側」の本来の役割だとすれば、「教える側」である教師自身が、その

学問の面白さを知っており、勉強することそれ自体の面白さを知っておくことが大切だと思う。この意味において、「学習幸福型」は、「教える側」である教師自身が強い憧れを持って学び続けることの大切さを教えてくれる。

2-5. 本時の授業のまとめ

最後に、本時の授業のまとめにかえて、授業者として以下のような所見を伝える。

- 「なぜ勉強しなければならないの？」という問いに対する絶対的な正解はない。
- この問いに対するどのような答え方が、問いを発した子どもに響く(腑に落ちる、納得する)かわからない。だから、「教える側」はなるべくたくさんの回答を選択肢として準備しておく必要があるのではないか。
- 「学習幸福型」は、現在の学校教育においてあまり重視されていないように思えるが、これからの教師が目指すべき重要な考え方ではないだろうか。

「なぜ勉強しなければならないの？」という問いと関わって、さらに理解や洞察を深めたい人のために、いくつかの書籍を紹介し¹⁴、受講生に授業の感想用紙を配付して授業を終える。

3. おわりに～本時の成果と課題～

以上が授業の概要であるが、「受講生の思考の前提をあらためて問い直して拡張する」という目的は達成されたのだろうか。この点を確認するために、学生の感想の一部を抜粋する¹⁵。

- * 私が思っていた以上の答え方があって驚いた。どれも納得できるものばかりだった。
- * 小さいころから勉強するのは当たり前で、意味なんて考えたことがなかったので、とても新鮮な質問だった。
- * 自分は「義務型」しか頭になかったけど、よく考えると受験生の時に「こんな勉強して意味あるのか」「辛いことばかりだ」と愚痴をこぼしていたことを思い出した。
- * 「バランス栄養型」は思いつかなかった答え方で驚かされました。
- * 私は勉強を手段として考えていたので「学習幸福型」もあるのかと感動しました。
- * 私は「未来リスク軽減型」が正しいと思っていたから、それしか思いつかなかったが、他の回答を見て、そういう考え方もありだなと思いました。
- * 私はよく母親に「大人になっても勉強し続けなければならないから、その訓練だ」と言われて、それで何となく理解しており、自分も大人になった時にこのように言うのだ

ろうと思っていましたが、「学習幸福型」の考えは本当にワクワクしました。

- * 班員の人が「勉強しなければならない」と聞いている時点で、その子は「勉強させられている」と感じる、と言っていた。一人でもそのように感じる子を減らしたいと思った。
- * 自分だったらどう説明するか考えているうちに、自分が「勉強」そのものに対してどう思っていたのか気づかされました。
- * 教師になって子どもから聞かれたら、子どもに合わせて返答できるようにしてあげたいと思った。子どもが前に進めるよう、背中を押してあげられる大人になりたい。
- * この問いはその場しのぎの回答をしてしまいがちであるが、そういうところから信頼は崩れていくと思うので、しっかり考えていこうと思った。
- * 今日の授業を受けて、自分の中の答えが変化した。世の中には勉強できない子どもたちもいる。勉強できることはとても幸せなことである。私は子どもたちに「社会に出たら役に立つ」という曖昧な言葉をかけないようにしていきたい。
- * 「勉強できることが幸せ」という回答は思いつきませんでした。気づかないからこそ、私たちは本当に幸せなのかかもしれません。この身近すぎて気づかない回答を子どもたちに伝えるためにはどうすればいいかを考えさせられました。

以上のような感想から、この授業を通じて、自身の経験を振り返り、認識を広げ、自分が教える側になった時の子どもとの向き合い方を考えるきっかけを受講生たちにあたえることができたものと考えている。ただし、一部の受講生には、でんじろう先生の授業について、「自分もあんな授業を受けなかった」「あんな先生に出会っていれば自分も変わっていたと思う」といったように、やや傍観的な立場からの感想や、「科学の実験だからできたのであり、他の科目では困難だと思う」、「受験を考えると実験ばかりすることはできない」といったように、他教科の取り組みから学ぶことへの可能性を閉ざすような認識が見られた。こうした受講生の認識や姿勢を、より当事者的で開かれたものへと変容させることが今後の課題である。また、今回の授業で紹介した 11 通りの答え方については、それらの相互関連性の構造化が不十分であるため、この点の検討については、今後の課題としたい。

注

¹筆者が担当する「教職入門」の受講生は、約 8 割が 1 年生、残りの 2 割弱が 2 年生である。

²この授業の基本となる発想は、橋爪 (1986)、荻谷 (2005)、

内田 (2007b), 苫野 (2013) の著書に多くを負っている。また授業では紹介しないが、雑誌『現代教育科学』明治図書(1992年6月号)の特集『勉強は何のためにするのか』と問われたら』や『総合教育技術』小学館(2005年4月号)の特集『なぜ勉強しなければいけないのか』子どもに聞かれたとき私はこう答える』の複数の論考を参考にしている。

- ³ 教職関連の授業に対する筆者の基本的なスタンスについては、織田 (2014) を参照。
- ⁴ この点については、教育評論家の尾木直樹の「大切なのは、子どもの「なぜ」「どうして」を大人がしっかりと受け止めるという構え」(2013年, 12頁), 「プロ教師の会」代表の諏訪哲二の『なぜ勉強しなくてはならないか』に正しい答えはない。もしそう問われたら、できるだけ相手に寄り添って親や教師としての参考意見を述べればよい』(尾木 2007年, 228頁) という見解を参照した。
- ⁵ この問題は、子どもの年齢や学校段階(例:幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校), 「勉強」の中身(例:授業中の勉強, 教科の勉強, 宿題, 受験勉強, 社会人としての勉強, 人生の勉強), そして自身の立場(例:学校教師, 保護者, 塾講師など)において、実際には多様な場面が想定できる。また、この授業の受講生の多くは教職志望であるが、取得を目指す教員免許状の校種や区分や教科は様々である。そのため、この問いに関わる具体的な場面については、あえて限定せずに、多様な前提と可能性のもとで意見を出してもらうようにしている。なお、「なぜ勉強するの?」ではなく、「なぜ勉強しなければならないの?」という問いにしている理由は、①この問いが学校や塾に通わざるを得ない状況にある子どもから出されることを想定しているため、②抽象度の高い回答ではなく、より具体的なレベルでの回答を想定しているため、である。
- ⁶ 養老は「そんなくだらないこと聞くんじゃない!」は「そんなくだらないことを考えるな!」という意味ではなく、要するに「自分で考えなさい」ということであり、考えることそれ自体が勉強であることを教えてくれたのだ、と理解したという(おた 2014年, 110頁)
- ⁷ この授業で紹介する書籍には、小学生や中学生の読者を想定して書かれた文献が含まれる。大学生を対象とした授業でこれらの文献を紹介する理由は、受講生が将来向き合う子どもたちを意識しながら思考できること、そしてより根本的な問題を考えるためには、対象年齢が低い文献の方がわかりやすく有益な場合があると判断するからである。
- ⁸ 就職において学歴が重視される理由は、難易度の高い入試を突破した人物は、理解力、記憶力、勤勉さ、我慢強さ、要領のよさなどの能力に優れている人物であると仮定され、これらは企業が求める能力と重なっているからであることを補足的に紹介する。「終身雇用を前提とした大手企業の採用基準は、新卒の場合、学歴+年齢からトータルで判断する。結果として採用

対象となるのは、そこそこいい大学の新卒で3年以上ダブっていない人になる。それが一番無難な人材である可能性が高いからだ。」(城 2012年, 140頁)

- ⁹ 林修によれば、受験の段階で将来やりたいことがある場合には、進路は見えやすい「積極的受験」である。これに対して、高校生にとって見える世界は狭く、将来やりたいことが見つからないことは十分あり得るため、その場合は、可能性を探したり、視野を広げに大学に行く「消極的受験」となるという(林 2013年, 20~21頁)。「未来リスク軽減型」は「消極的受験」を内包する。
- ¹⁰ 同じく予備校講師の富田一彦は「誰も正解を知らない未知の世界へ歩みを進める前に、『誰かが作った箱庭』の中で『必ずあるはずの正解』を合理的に探し出す訓練は、本来の勉強をより賢明に進めていく上で、極めて有効な準備段階だと思う」(富田 2012年, 3頁) と述べている。
- ¹¹ 関連する考え方として、東京大学学生(当時)による指摘を補足的に紹介する。「受験勉強に人生の貴重な時間を費やして手に入れた宝物は、学歴や点数や順位や偏差値ではなく、正々堂々チャレンジし、最後までやり抜いたという達成感と自信です。それ以外のものはすべてオマケだと思います。」(石井 2009年, 248頁)
- ¹² 他に、居酒屋の店主が曜日や天候や給料日を考慮して仕込みの量を決定する話をはじめとして、野球の監督や保険会社の社員が確率計算をする話(秋山・門間, 2011年)を補足的に紹介する。
- ¹³ 関連する考え方として、作家の鈴木光司による指摘を補足的に紹介する。「文系・理系にこだわらずに勉強することは、決して無駄ではありません。むしろ高校時代くらいは、文系・理系の枠にはめず、いろいろな科目を勉強させるべきです。わずか16歳で進路を決めるなんて早すぎるし、受験科目にない勉強はしなくていいと切り捨ててしまうと偏った人間ができてしまいます」(鈴木 2006年, 20頁)。この指摘は「未来リスク軽減型」であり、食事という言葉を使っていないものの、「バランス栄養摂取型」と同様の指摘である。
- ¹⁴ 入門書として、おた(2013,2014)、齋藤(2011)、苫野(2013)、林(2013)を紹介する。
- ¹⁵ 授業の感想用紙は授業終了時刻の10分前に配布する。そのため、受講生が感想用紙を記入する時間はおよそ10分である。この短い時間で授業者の意図や思いを超えた読み応えのある感想を書いてくれる受講生たちには、いつも驚かされる。

参考文献

- 秋山仁・門間明(2011)『高校数学, 居酒屋で教えるとうなります』NHK出版新書。
- 石井大地(2009)『勉強する理由』ディスカバー21。
- 上野千鶴子(2002)『サヨナラ, 学校化社会』太郎次郎社。

- 内田樹 (2007a) 『狼少年のパラドクスーウチダ式教育再生論』朝日新聞社.
- 内田樹 (2007b) 『下流志向ー学ばない子どもたち 働かない若者たち』講談社.
- おおたとしまさ編著 (2013) 『子どもはなぜ勉強しなくちゃいけないの?』日経 BP 社.
- おおたとしまさ編著 (2014) 『続・子どもはなぜ勉強しなくちゃいけないの?』日経 BP 社.
- 尾木直樹 (2013) 『尾木ママ, どうして勉強しなくちゃいけないの?』主婦と生活社.
- 鍵本聡 (2007) 「学力は真実を見抜く力だ」7人の特別講義プロジェクト編著『16歳の教科書~なぜ学び, なにを学ぶのか』講談社, 43-72.
- 苅谷剛彦 (2005) 『学校って何だろうー教育の社会学入門』筑摩書房.
- 苅谷剛彦・増田ユリヤ (2006) 『欲ばり過ぎるニッポンの教育』講談社現代新書.
- 齋藤孝 (2004) 『相手を伸ばす! 教え力』宝島社.
- 齋藤孝 (2005) 『齋藤孝の勉強のチカラ!』宝島社.
- 齋藤孝 (2011) 『人はなぜ学ばなければならないのか』実業之日本社.
- 齋藤孝・西村則康 (2014) 『なぜ受験勉強は人生に役立つのか』祥伝社.
- 城繁幸 (2012) 『若者を殺すのは誰か?』扶桑社新書.
- 鈴木光司 (2006) 『なぜ勉強するのか?』SBクリエイティブ.
- 諏訪哲二 (2007) 『なぜ勉強させるのか』光文社新書.
- 橋本俊詔 (2015) 『経済学部タチバナキ教授が見たニッポンの大学教授と大学生』東洋経済新報社.
- 苫野一徳 (2013) 『勉強するのは何のため?』日本評論社.
- 富田一彦 (2012) 『試験勉強という名の知的冒険』大和書房.
- 橋爪貞雄 (1986) 『なぜ, こんな勉強するのー中学生の勉強観, 学歴観に見る悩み』黎明書房.
- 林修 (2013) 『受験必要論ー人生の基礎は受験で作り得る』集英社.
- ビートたけし (2012) 『間抜けの構造』新潮新書.
- 広田照幸 (2011) 『教育論議の作法ー教育の日常を懐疑的に読み解く』時事通信社.
- 山田昌弘 (2004) 『希望格差社会ー「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房.
- 織田泰幸 (2014) 「教職志望学生の自明性を問い直すための授業実践 (1) ~ 「個性」に関する言説の検討~」『大学教育研究ー三重大学授業研究交流誌』第 22 号, 39-44.

SUMMARY

The aim of the present study is to evaluate the significance, outcomes and challenges of lesson practice aimed at questioning taken-for-granted assumptions of undergraduate students in Teacher Training. To be concrete, I present the overview of my lesson practice how students answer a question 'Why is it that I have to learn?' in "Introduction to Teaching Profession" class is discussed.

KEYWORDS: teaching profession, study, learning, happiness of learning, yearning to yearning

†Yasuyuki Oda*:The Lesson Practice Aimed at Questioning Taken-for-granted Assumptions of Undergraduate Students in Teacher Training

* Faculty of Education, Mie University 1577 Kurima-machiya-cho Tsu city, Mie, 514-8507 Japan